

アメリカ医療の現実

—ある日本人開業医のたより—

第1回

アメリカの医学教育について

Kobayashi Medical Clinic 小林 秀一 *Shuichi Kobayashi*

私は1986年に日本の医学部を卒業しました。その後、呼吸器内科での臨床と研究を経て、生理学の基礎研究を目的に1995年に渡米いたしました。当初は3年ほどで帰国する予定でいましたが、体調を崩し医療機関を受診した際に、プライバシーを重視し、不要な検査や投薬をできるかぎり控えようとする無駄のない診療を実体験したことからアメリカの臨床に興味を覚え、研究生活の傍らにUSMLEという資格試験を受験しました。この試験に合格すると、次は臨床の現場で力を試したい気持ちを抑えきれず、2000年からは内科レジデンスプログラムに参加、その3年後にアメリカ医師免許を取得しました。結局、日本に戻ることなく開業し、以降、カリフォルニア州において内科医として診療活動を続け、現在に至ります。

振り返ると、アメリカで医師免許を取得することを思い立ってから14年の歳月が流れました。日本にて医学教育を受け、臨床の経験を持つ者として、さまざまな場面で両国の仕組みの違いに遭遇し、考え惑い、頭を抱えることが多くありました。

外国人がアメリカにて医師として合法的に働けるビザを取得する難しさに始まり、資格取得のための受験、レジデントポジションの獲得、レジデント生活などの医師免許取得にまつわるエピソード

ドや、開業してみて初めてすべてを理解したアメリカの保険制度の複雑な仕組みなど、良い面でも悪い面でも日本での常識や価値観を覆すようなことがたくさんあります。

アメリカで開業医として臨床に携わる立場から、外部からはわかりにくいこの国の医療の現実について、医学教育、医療保険制度、診療の実際、医療の自由化の功罪などを順次取り上げ、ご紹介したいと思います。連載の第1回目として、アメリカで医師資格を取得するための仕組みと医学教育の実情について、日本の制度と比較しながら概説いたします。

医師資格取得のためのステップ

医師はアメリカにおいてもエリート資格の1つです。社会的地位の魅力ばかりではなく、他の業種と比べて不況の中でも比較的その影響を受けにくく、経済的な安定を得られやすいことなどから、全米の多くの優秀な学生が医師の資格を目指し厳しい競争を繰り広げています。アメリカで医師資格を取得するためには、以下のステップを順にこなしてゆかなければなりません。